神的エネルゲイアの経験と信

――ロゴス・キリストを信じるとは、いかなることか――

谷　隆一郎

はじめに

信・信仰（ピスティス）の志向的自己超出的かたち

「神的エネルゲイアの経験と信」という題目を掲げたが、今回の話は、拙著『人間と宇宙的神化――証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって――』（知泉書館、二〇〇九年）の内容と、根本ではそれほど変わるところはない。ただ本日は、とくに「エネルゲイア（働きないし活動）の経験」ということに焦点を当て、中心の問題を改めて吟味したいと思う。

素朴に言うと、これは、ロゴス・キリストの受肉を「知る」のではなく「信じる」ということの意味を、その成立のいわば原初的場面から問い直してゆくということである。さまざまなドグマの表現を思い出してみれば分かるように、そこにはロゴス・キリストの受肉を「知る」とは書かれていないのであって、「師父たちの伝承に従ってわれわれはかく告白する、信ずる」という表現が基本となっている。この点での「知る」と「信ずる」という言葉の位相の違いについて基本的に反省することが、本日の眼目の一つでもある。

さて、神的エネルゲイアの経験について、ニュッサのグレゴリオスの次の表現にまず注目しておきたい。

「神が肉（＝人間）においてわれわれに顕現したことの証明を求めるのであれば、神の働き（エネルゲイア）を見つめるべきである。……われわれが全宇宙（世界）を鳥瞰し、この世界に働く摂理およびわれわれの生に与えられる神からの恩恵を吟味するならば、われわれは、生成してくるものを創り出し、存在するものを保持する何らかの力が存在していることを把握できよう。それと同時に、肉を通してわれわれに自らを現した神についても、神の働きを受けた驚くべき事柄（奇蹟）が神性の現れの十分な証拠になると考えてきた。」（『教理大講話』）。

ここからある程度窺えるように、主として東方・ギリシア教父の伝統にあっては、神のロゴスの受肉ということをはじめから思弁的なかたちで表現するというよりは、むしろわれわれの経験（神的働きの経験）の場面から語り出すという方法が、一つの中心にあるということができよう。

本日お集まりの皆様の中には、キリスト教の中におられる方、信じていると仰る方も多いと思われる。あるいはまた、特定の教会に所属していない、信じていないという方もいらっしゃるであろうが、いずれにしても（信じているという人にとっても、信じていないという人にとっても）、「信じる」あるいは「信仰」について、通俗的な了解をひとたび離れて、その成立の場面そのものから問い直し担いゆくことが必要であろう。あらかじめ言うと、信（ピスティス）とは、人間の単なる所有物ではなく、人間の存在することの根底を揺がし、その「善きかたち」、つまり「人間的本性の成就ないし開花」に向けて突き動かしてくる何ものかだと思われる。

このことは、あらゆる実証的学問、あるいは客体知の領域を旨とする学問に対するひとつの挑戦でもある。つまり、「安心して確保されている主体・自己はどこにもない」。言うまでもなく「わたし・自己在り」ということは、旧約以来の伝統にあって、神（ヤハウェ）の名として語られてきた。それゆえ、われわれの「わたし・自己の在ること」は、つねに謎かけられているのだ。そして、その最も中核に関わってくる「信・信仰とは何なのか」といえば、それは、時々刻々と非存在に晒され「在り、かつ在らぬ」われわれが、真に存在に与り得るかたち、あるいはその道行きの根拠に関わるかたちであろう。

そこで本日の提題にあっては、単に特殊な教義の枠内においてではなく、「人間・自己の真の成立」、そして「人

間本性の開花・成就「に関わる普遍的な問題として、「信」ということをいささか問い披いていきたいと思う。

ちなみに、欧米でも日本でも、教義・ドグマの書物が概して余り面白くないと感じられるのは（もちろん学ぶべきことは多々あるが）、主体・自己の在るということを問題の局外に措いて、永遠と時間との切り結ぶ「受肉」などということをしも、ある意味では実証的に言挙げしている場合が多いからだと思われる。

言うまでもないことだが、後期スコラおよび西欧近代以降の思考の枠組みにあっては、神学と哲学、信仰と理性などの分離・独立といった事柄がひとつの規範となっている。だが、教父たちにあっては、あるいは使徒たち自身のイエス・キリストとの出会いの場面にまで遡るならば、狭義の神学と哲学、理性と信仰との分離といった捉え方の彼方に、右のような枠組みが超えられてゆくであろう。「愛智の道行き」（フィロソフィア）と「神学」（神をふさわしく讃えること）とは、当時の意味合いではほとんどひとつに重なってくる。

さらに、あらかじめ申し上げるなら、「キリストとは誰なのか」ということは、とりもなおさず「人間とは何か、何で在り得るのか」ということの意味と根拠に関わると考えられる。おおかたの予想に反するかもしれないが、広い意味での哲学（フィロソフィア）の、おそらく最前線に位置する問題として、こういった「ロゴス・キリストの受肉」というテーマをいささか吟味してゆきたいのである。

前掲の拙著『人間と宇宙的神化』では、「ロゴス・キリストの受肉」や「神的エネルゲイアの経験」といったテーマは最後の章で扱ったが、振り返ってみると、それは愛智としての探究が発動した端緒・始まりにおいてすでに働き、現前しているものであったはずである。そういう意味では、探究の端緒が同時に終極でもあるような、一種の円環的・自己還帰的な構造がそこに存する。そしてそれは、人間そのものの根本的意味にも関わってくるであろう。

ともあれ、基本的な探究方向としては、「ウーシアとエネルゲイアの峻別」という捉え方を基盤にしているのだが、神的エネルゲイアの経験とは、ロゴス・キリストの受肉が初めて語り出されるための端緒であり場であろうということである。客体的事実としてロゴス・キリストの受肉が知られるというよりは、むしろそれが、神的エネルゲイアの経験によって証示され、いわば志向的に知られるというべ

きであろう。もちろん通常の語り口においては、二千年前の客体的事実であるかのごとく過去的な出来事として語られることはあってよい。だが、これを一歩踏み込んで考えると、むしろ、今、ここなる出会い（カイロス）・瞬間といった「受肉の現在」ともいうべき事柄に、時間論という意味でも人間本性の成立の根本的な意味においても、つねに収斂してくると考えられよう。

一　神的エネルゲイアの経験から、その根拠へ

ここでは、論の典拠として、周知のテクストではあるが、ニュッサのグレゴリオスの『モーセの生涯』と『雅歌講話』、およびアウグスティヌスの『告白』を、少しく取り上げる。それぞれのテクストはきわめて豊かな文脈であるので、いずれを取ってみても一つの研究発表に十分に足る内容を有しているが、本日は、極く簡単にその基本線を取り出すことにする。

まず、ニュッサのグレゴリオスの『モーセの生涯』から見ておこう。モーセはシナイ山において神の顕現にまみえた。これはよく知られた箇所であるが、ヤハウェの名は「わたしは在る、在らんとする」（出エジプト三・一四）（ギリシア語では「わたしは在るところの者である」というような意味合いの言葉で訳される）と啓示された。

東方教父の大部分の人々は、ギリシア語で思索しているわけだが、ギリシア語で思索しつつ、ヘブライのダイナミズムというものを徹底して担っていったと考えられる。そこには大きな緊張が存在し、それがあまりに大きなものであったからこそ、東方教父あるいはラテン教父の伝統は、後世の範とするに足る大きな思想潮流となったと言えよう。そして、二つの思想潮流（ヘレニズムとヘブライズム）の出会いという未曾有の出来事の縮図が、さまざまな箇所で見受けられる。

さて、この「モーセに対する神の顕現」を解釈するにあたって、ニュッサのグレゴリオスにあっては、通俗的な「過去・現在・未来」という数直線的な時間把握というものは突破され、旧約の歴史記述が、いわば新約の光、キリストの霊において受け止められ、観想されている。すなわち、ある意味では「今」という同時性において、モーセの生涯そのものの象徴的解釈がなされているわけで、すべての人間の本来的な道行きに即して語られていると言ってよ

い。それは、個々の要素の実証的・字義的な分析を遥かに超えた視点での解釈の方法である。

ここで強調したいのは、以下のことである。すなわち、闇の内なる神の顕現ということが語られるが、そのときモーセは「自己よりも大なる者に成りゆく」といった表現が看取されるということである。人間的本性の完成は、そうしたダイナミズム、徹底した自己超越（エペクタシス）においてあるということが、ここに読み取られよう。そして、実はそれは、神が顕現した姿でもあるという方向で解釈してみたいと思う。モーセが「自己よりも高くなる」、あるいは「自己よりもより大になる」という自己超越のかたちそのものが、本来は不可視であり知られざる神が、何らかこの有限な場に顕現してきたかたちであろう。すなわち、神は、「神を愛するものとして」（あるいは「神への愛として」）顕現する、そういった方向で解釈されうるであろう。

そこで、原典を少し確認しておく。「モーセが知において、より大なる者と成ったとき、彼は闇（暗黒）のうちで神を見たと語る。」（『モーセの生涯』Ⅱ・一六四）。

「神の語り得ざる教えによって知らされたモーセは、自己よりもさらに多いなる者に（自ら）成りゆく。」（同、Ⅰ・五六）。

「それゆえ完全なる生とは、完全性の或る限定されたかたちが、さらなる前進を決して妨げないような生である。そして、より善きものへと生がつねに増大してゆくことこそが、魂にとって完全性への道なのであった。なぜなら、こうした登攀によって自らの生をいかなる地上的なものよりも高めてゆく人は、必ずや自己自身よりもつねにより高き者に成りゆくからである。」（同、Ⅱ・二〇六―二〇七）。

さらに同じ著作に「人間本性の完全性とは、おそらく善（美）により多く与ることを絶えず意志し志向することに存する」（同、Ⅰ・一〇）とも表現されている。

東方教父においては、善（アガトン）と美（カロン）とはほとんど同義的に使われることが多く、「善」「美」いずれに読んでもよいであろう。もちろん古代ギリシアにおいては、（今日御出席の加藤信朗先生がかつてお書きになったように）、カロンとアガトンとの位相の違いがあるのは確かである。が、おそらく教父たちにあっては、キリスト自身の姿がある超越的な価値を語る、すなわち美（カロン）が何らかこの時間的有限なる世界に顕現したという、その信（ピスティス）に支えられて、善（アガトン）と美

（カロン）とが何か基本的には同一なるものとして用いられるようになったと思われる。

ともあれ、エペクタシス（自己超越、自己を超え出てゆくこと）というかたち自身が神の顕現であること、そして、神の本質（ウーシア）は知られないが、その働き（エネルゲイア）の経験として現存してくるということを、右の文脈から読み取ることができるであろう。

次に、同じくニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』であるが、その一つの中心に「愛の傷手」（第四講話など）という言葉がある。『雅歌講話』では、「花嫁」とはもちろんわれわれ人間すべてであり、花婿は神を象徴的に指し示している。そして、花婿の「愛の矢」によって神の愛（アガペー）である霊（プネウマ）を受けて、人間が愛の傷手を受けるのである。

この「愛の傷手」とは、信仰（ピスティス）という魂のかたちを含意していると考えられよう。その意味での信（ピスティス）は、もちろん自由な応答によって愛として働き出す。それはつまり、必然的な出来事ではなくて、自由な聴従、自由な応答として現出してくる。そこで、先ほど『モーセの生涯』で見た、モーセにおける神の顕現とほぼ同様に、次のことが読み取られるであろう。

花婿つまり神は、姿を隠していて知られ得ない。神はその意味では超越の極みであるが、しかし魂が神の働き（エネルゲイア）あるいは愛（アガペー）に貫かれたとき、そこに一つの確かさがあり、それは神的エネルゲイアの経験であると考えられる。つまり、花嫁（あるいは人間）の愛というものは、働き（エネルゲイア）としては神の顕現のかたちなのである。だが、それが、本質（ウーシア）としては知られないロゴス・キリストを指し示している、そのように読めると思われる。「神への（原文通りには「あなたへの」）霊魂の関わりが、あなたをあらわにするあなたの名だ」（第二講話）というような表現も為される。あっさりと言うならば、「神への関わり、神への愛が、神をあらわにする名である」という基本線がここに読み取られよう。

さらに、これもまたよく知られたテクストであるが、同様のことが読み取られるものを挙げておこう。アウグスティヌス『告白』の第十巻である。「主よ、わたしはあなた

を疑いをもってではなく、確かな知をもって愛する。あなたはわたしの心をあなたの言葉をもって貫かれたので、わたしはあなたを愛してしまった。」（『告白』第十巻第六章）と語られている。

ここでは、心（cor）という語が使われている。が、少し前の箇所までは、「はらわた」「胸もと」などと言われ、すなわち神の言葉が自我の砦ないし城に押し寄せて、いわば城の外堀が埋められたような段階を経て、段々とその攻撃が城そのものに及び、かくして最後にすべてが陥落する、そういった表現が、ここに挙げた文章であると言えよう。これについては、加藤信朗先生が以前に「cor, praecordia, viscera」という論文をお書きになり、そこで見事に、神の言葉が人間の自我の砦に押し寄せるその様を、身体のトポロジーとして明確に示しておられる。今はその最後の部分を取り上げたということになる。そこにあって、神の言葉とはもちろん聖書の言葉が意味されていると同時に、単数の verbum が用いられているので、ロゴス・キリストそのものが指し示されているであろう。

かくして、神の言葉、ロゴス・キリストの働きが、われわれの自我の最も中核である心を貫いたとき、つまり自我の砦が陥落したとき、その神の言葉、ロゴス・キリストの「働き」が現前してくる。これは逆に、われわれの側からは、自己ないし自我の中心が、あなたのことば、あなたの愛によって貫かれたというその経験そのものが、ロゴス・キリストの何らかの顕現の姿である、と言うこともできよう。繰り返して言うなら、その場合、ウーシア（実体ないし本質）としては知られざる超越が、エネルゲイア（働きないし活動）として、そのようなかたちで現れてくるということを、ここで強調しておきたい。

同様にまた、ベルナルドゥスの『雅歌について』、あるいはシエナのカタリナの『対話』という書物（これはある意味では、トマス・アクィナスが終わったところから始めているとでもいうような、凄まじい神経験を土台にした「魂と神との対話」である）、それから十字架のヨハネの『霊の賛歌』、『愛の生ける炎』、アビラのテレジアの著作、などは、神の愛が同時的に働いている姿を、それぞれの仕方で受容して、豊かに語り出したものであろう。

これらは、最初に述べたように、「安心して確保されている主体・自己はどこにもない」という、われわれの存在

の基底・根底が突破されてくる、その「確かさ」として経験されているのである。この確かさに比べれば（ついでに言うなら）、デカルト的な「cogito, ergo sum（我思う、ゆえに我在り）」などは、いわば仮初の確実性であろう。むしろそういった仮初の確実性がさらに突き抜けられてくるような経験が存する。その経験とは、必ずしも特殊な能力に恵まれた人の経験というわけではなく、われわれもまた何ほどかそれに参与できるような普遍的な経験であろうと思われる。これは、そこからさらに根源・根拠へ遡行する道を促していると言えよう。

こうした意味で、信・信仰というかたちは、根拠（アルケー）への無限の愛として働き出す、そして、それが神の何らか受肉してきた姿であり、真実の「神の受肉存在」を指し示しているのである。すなわち、客体的知としてではなく、いわば志向的知として、ロゴス・キリストが証示されていると考えられよう。

二　「カルケドン信条」における四つの否定辞をめぐって

そこで次に、「カルケドン信条」について述べておこう。これは数世紀に及ぶドグマの歴史のひとつの結節点であり、ゆっくりと敷衍してゆけば豊かな内容を有しているのだが、ここでは以下のことだけを確認しておきたい。

アタナシオスの有名な言葉で、「神のロゴスが人間となったのは、人間が神となるためだ」というものがある（『ロゴスの受肉について』五四節）。通常「人間となったのは」と訳される箇所は、むしろ「人間のうちに宿ったのは」という意味合いである。その文章の意味するところは「人間が神に与らしめられるためである」ということであって、端的に「神になる」ということはあり得ない。何らか神の生命に与らしめられるためであるというのであって、相関的な表現として語られている。すなわち、われわれの主体なり自己なりが、その本性の成就に向かうような（それは「救い」と言っていいであろうが）、そういった道の探究を離れて、ある客体的な出来事として神のロゴスが人間となったということが言われているのではなく、あくまで相関的な表現として語られているのである。

また、そうした「ニカイア信条」の後を承けて、カッパドキアの教父の一人ナジアンゾスのグレゴリオスは、「人性（人間本性）は神性によって摂取されなければ救われな

い」（『書簡』一〇一）と、より明確に語っている。その意味で、人性（人間本性）は、それ自身として自存してはいないのだ。ここでも、安心して確保されている主体などはどこにもない。つまりそのことは、われわれが自らに与えられた可能性の開花・成就へと何らか開かれた存在だということであろう。

ところで、「カルケドン信条」の内容は、簡単に言えば、以下の三つにまとめられる。

(i) イエス・キリストは真の神であり、かつ真の人間である。

(ii) 神性（神的自然・本性）と人性（人間的自然・本性）とは、ヒュポスタシス（個的現実）に即して結合し、一なるヒュポスタシスとしてキリストが存在している。

(iii) だがその際、神性と人性とはそれぞれが自らを十全に保持しつつ、「融合せず、変化せず、分割せず、分離せず」、一つのヒュポスタシス・キリストへと共合している。

とくに(iii)については、「四つの否定辞」についてさまざまな解釈が可能であろうが、ここでは、いかなる結合の型によっても捉えられない不知の表明であるということを強調しておきたい。つまり、ロゴス・キリストを、われわれの客体的な知の対象として、認識の限定に引きずり下ろしてはならないのであって、それはむしろ、信（ピスティス）と、そこから現出する愛が志向する究極のものとして、最後まで開かれた超越にとどまるのだ。

証聖者マクシモスも言うことであるが、無限性こそ神の勝義の名なのである。教義（ドグマ）というと、何か特殊な認識の構造を打ち出したかのように見られることも多いであろうが、右のように否定表現を受け止めれば、「カルケドン信条」の四つの否定辞というものは、単に虚しい不知の表明ではない。かえって、神性と人性との結合は、いかなる二つの事物（形相と質料であれ、魂と身体であれ）、ありとあらゆる二つのものの結合でもって了解しようとしても、ついに不知に留まる（どうやっても分からない）、という徹底した不知の表明なのだ。しかしそれは、虚しい不知の表明ではなく、かえって人間が真に人間として成立するための、その場と構造を、否定を介して守っていると考えられるのである。一見合理的な限定あるいは知による把握がすべて異端として斥けられたということの意味も、ここに存すると思われる。

ともあれ、ある種の合理的な限定あるいは知による把握を、ことごとくどこまでも突破してくる、そういった無限性への開きであり自己超越の姿を、教義の表現という仕方であらためて確認したのが「カルケドン信条」であろう。その場合、「神性と人性との結合が無限性に定位されている、無限性に向かって開かれていること」と、「人性が神性へと結合し得る可能性を有しているということ」とは、微妙に関わり合っている。つまり両者は、決して二律背反ではなく、表裏一体していると言ってよい。

繰り返すならば、神的エネルゲイアの経験（後には「神人的エネルゲイア」という言葉が、稀にではあるが使われる）が、神人的存在を、その自らの経験の内奥に遥かに指し示している。しかし、神人的存在自身がある種の客体的な事実として語られるということではない。受肉の問題は、このような微妙な緊張のうちにあると言うべきであろう。

三　神的エネルゲイアのコスモロジー
――人間を紐帯とした全一的交わり（エクレシア）――

さて、これ以降は主として、証聖者マクシモスの文脈を念頭において話を進めることにしたい。

神的エネルゲイア、神的働きは、端的に言えば、万物において根源的結合力として働いている。それは、すべての存在、すべての本性（ピュシス）の根底において一性をもたらす力として働いているのである。

ものの成り立ちにおける一性については、無生物、生物、植物、動物は、それぞれ何かエレメントとしては多なる要素から成っているが、それらを何ほどか「一」に成立させている力は、ある意味では深く隠されている。今日、ＤＮＡやＲＮＡといった生物学的な知見として、さまざまな解析がほぼ完璧に近いまでに為されているようである。ただ、その道の専門家によると、そういった解析が生物学あるいは分子生物学として進めば進むほど、ますます本質は謎めいてくるという。一つの生命体がまさに一つのものとして生きているということ自体の謎はますます大きくなるのだ。また、ハンス・ドリーシュという人（一八六七―一九四一）は晩年、発生生物学の分野でエンテレヒー（Entelechie）という概念を用いて不評を買ったようであるが、これは本日のような話とは、そのまま重なってくるように思われる。つまり、無生物、生物、植物、動物それぞれに「在ること」、

「生きること」の一性の度合いは高まってくるであろう。しかし、その物的エレメント（あるいはそこに「魂」という言葉を持ち込むとしても）、要素そのものは、その一性を成立させているある根源的な結合力に与ってこそ、何らか成立していると言うべきなのである。

では、人間はどうであろうか。一言で言うなら、「人間以下のもの（存在物）の成り立ちにおける一性」と「人間本性における一性の成立」との間には、ある意味で無限の隔たり、根源的な次元の違いというものがあると思われる。進化論の類いはエレメントの連続性にこだわるので、エイドスの現出そのものの根源的働きには眼を閉ざしていると言ってよいかもしれない。それに対して、人間を人間として捉える場合には（アウグスティヌスの『三位一体論』が徹底して探究したように）、「記憶し、知り、愛する」というその働きの中で、一性の度合いが次元を超えて高まってくるのである。これは言い換えると、神的エネルゲイアを受容し、より豊かに発現させた姿であると言ってもよいだろう。

さらに、マクシモスにおいては、「善く在る（善く意志する、善く生きる）」ということが成り立ってきたときに（これはほとんどアレテーという言葉と意味が重なってくるのだが）、そこには「単に存在する」ことからの大きな飛躍が見られる。そして、その「善く在ること」が、「つねに善く在ること」（これは神の名としても語られる）へと徹底して開かれているのである。そういう意味では、「善」ということの何らかの顕現に関して、(i)、人間本性の成立と、(ii)、「善く在ること」（アレテー）の成立とに、それぞれ奇蹟的に一性の次元の高まりを看取することができよう。

ところで、マクシモスにおいては「善く在る」ということの成立あるいはアレテーとは、「神の受肉したかたちだ」という思いきった表現も為されている。諸々のアレテーという仕方で神が身体化してくるのだが、そこにおいて一性（一ということ）が、ある神的な姿において何ほどか顕現してきていると言うこともできよう。こうしたことからして、人間本性とは自然・本性の紐帯であると洞察されている。すなわち、あらゆる感覚的なものも思惟的なものも含めて、すべてがアレテーのうちに、一性のより高いかたちで集約されてくる。

ところで、「思慮」と「正義」という徳は、テオリア・

知に関わる徳であり、この二つが結合して知恵（ソフィア）が成り立っており、「勇気」と「節制」という実践に関わる徳が結合して柔和さというものが成り立っているという（柔和さという言葉には、マタイ伝の「わたしは柔和で謙遜な者である」という表現が根源にあろう）。そしてさらに、知恵と柔和さが結合して、アガペー（愛）というものが、すべてのアレテーの統合として成り立ってくると言われる。これはほんの概観であるが、神的エネルゲイア（働き）、神的なプネウマ（霊）、そして神的なアガペー（愛）といった働きを受容したわれわれの愛というかたちが、ある意味では神化（神への与り）という方向へと定位されているのである。

マクシモスのテクストにあっては、そのことは単に人間の内面における出来事というよりは、大きく宇宙論的な規模において語られている。すべての自然・本性、すべての存在物（あらゆる感覚的なもの、思惟的なものを含めて）が、まずは人間という存在の中に集約され、そしてそれがさらにアレテー（善く在ること）の成立において、一性をより神的に顕現させた姿としてそこへと定位されるのである。全体の輪郭としては、そのように言えるであろう。

もちろん、そういった全一的な神の顕現というかたちは、必然的に生ずるものではなく、むしろわれわれとしては、それに背反する罪なり悪なりの可能性に、その都度晒されている。そうすると、先ほど挙げたような「アレテーの統合としての愛」といった事柄の成り立ちとしては、むしろ自然・本性に背反するものとしての罪（それは非存在への頽落、分裂という意味合いも有する）が、その都度否定され蔑されてゆくという道筋において、はじめて顕現してくるのである。これは非常に重い、表裏一体する事態として、問題の根底に潜んでいることであろう。

このように、神的エネルゲイアと神的プネウマは、すべてのもの（ピュシス）の根底に、まずは根源的な結合力として働いている。これは、創造ということを考えても、またその創造を今現に持続させている（保持している）場面に即して考えても、窺われることである。人間という存在者は、そうした神的エネルゲイアないし神的プネウマを、ロゴス的（知性的）に受容し、そして発現させた姿である。ただその姿は、まだ可能性の域にとどまっているのであって、さらに次元を高めて「善く在ること」（アレテー）の

成立へと開かれている。そしてさらに、個々のアレテーは、アガペーというアレテーの統合の姿へと開かれているのである。

ところで、先ほど述べたように、「自然・本性に反する」というごく単純な表現が、罪の定義として使われる。すなわち罪とは、自然・本性に反する仕方でさまざまな能力なり力なりを用いてしまうことであり、また、さまざま有限な事物に自然・本性に反する仕方で関わってしまうことである。そうした罪というものは、大昔の人類の祖先の出来事がわれわれに遺伝してきているというよりは、むしろ人間的自由の構造それ自身の問題として語られよう。ともあれ、人間がピュシスの紐帯として働いて全一的な交わりへと開かれていること、つまり、人と人、人と物、万物が相俟ってそうした全一的な姿へと開かれているということ、それが神の何らかの顕現の姿として意味づけられるであろう。

次の表現は、右のことを集約的に語っている。

「人間は各々の異なり・分割の両極におのずと関係しているので、それらの中間点にあってそれらを統合・一性へともたらす力を有している。そうした力によってこそ、それら分割されたものの完成される道（方式）が可能となり、神的な目的の偉大な神秘があらわに顕現してくるのだ。……そしてその力は、諸々の実体（ウーシア）におけるそれぞれの極に調和ある仕方で関わって、最も近いものから最も遠いものへ、また、より悪いものからより善いものへとそれらを高め、さらには神へと上昇して、統合・一性をそれらにもたらす。そのために、人間は諸々の実体（存在物）の最後に生ぜしめられ、自然・本性的な紐帯として、諸々の部分を通して普遍的な極（頂き）を熟考し……大きな隔たりによって互いに自然・本性的に異なっているさまざまなものを、自らのうちで一性へと導くのである。」（証聖者マクシモス『難問集（アンビグア）』PG九一、一三〇五BC）。

さらにまた、「《善く》ということが自由に〔意志的な仕方で〕結合することがなければ、他の仕方では両極における真理が現出することも守られることもない。」と言われる。この点は穿って言うと、次のことを意味しよう。すなわち、それ以前には有限なさまざまなもの（真実には在らぬもの）に、われわれが何ほどか執着してきた姿がある。そして、その根底では傲りあるいは自己への執着が支配し

ていたものが突破されて、何らか神的エネルゲイアによってアガペーが発動してくるであろう。

そうした愛の傷手、愛の発動ということにおいて（完全な姿は遥か遠いものだとしても）多少とも右のような事態を経験することはありうるのであって、そのときにはじめて、「存在する」とか、「つねに善く存在する」といったことの意味が、あらわに反省されてくると言えよう。それは、根源的な経験において、すなわち主体・自己の「在る」ということの意味が揺がされるような出会いを通して、存在の意味があらためて吟味されてくることだ、と言ってもよいであろう。

罪の問題についてはわずかに触れるにとどめざるをえないが、代表的なテクストとしては、次のように存在論的な広がりをもって語られている。「……無思慮な仕方で《在らぬもの》へと傾くことによって、自分自身に対して《在ること》の欠如を招来させている。」（同、PG九一、一一六四D）とある。そこにあって罪や悪の問題が、「存在のより善き顕現か、存在の欠如か」という文脈の中で語られるのである。

四　神人的エネルゲイアとロゴス・キリストの受肉（神人性）

さて、これまで述べてきたことを、改めて使徒たちの経験の場面に即して見つめてみたい。

イエス・キリストとの出会いによって、使徒たちはおのれの生命を賭しても悔いなし、というほどの限りない愛に促されたが、これは神的エネルゲイアあるいは神人的エネルゲイアとの出会いであろう。

イエス・キリストは「受難を被りつつ神であり、神的な業を為しつつ人間であった」という表現がとられる。「なぜならば、キリストは、神性と人性という二つの真の自然・本性（ピュシス）の語り得ざる一性に即した神のヒュポスタシスであったからである。」この箇所については、われわれにおける「発見の順序」としては、神的エネルゲイアの経験すなわち信（ピスティス）のかたちからロゴス・キリストの受肉が指し示される、ということに注意しておきたい。

ロゴス・キリストの受肉が、二千年前の客体的な事実としてあったというように断定してしまうと、これは信仰と

いうことのいわば贔屓の引き倒しにもなるのではなかろうか。そこでむしろ、「同時的に、今」という問題がそこに関わってくる。が、それはさしあたって言うとすれば、発見の順序としては、あくまで使徒たちにおける、あるいは使徒たちに通ずるすべての人々におけるものなのである。これはまた、旧約のモーセでもエレミアでも、すべての人において、というところにまで遡ると考えられるが、いずれにしても、神的エネルゲイアの経験からロゴス・キリストの受肉が遥かに指し示されるということであろう。つまり、単に客体的にではなく、主体的経験の根底に現存している神の働き（神的エネルゲイアあるいは神人的エネルゲイア）の経験から、ロゴス・キリストの受肉存在が指し示されるのである。

しかし、もとより「実在的順序」としては、やはりロゴス・キリストの受肉存在から神的エネルゲイアが働き出すと言うべきである。従って、そこには一つの微妙な円環が存しているであろう。すでに述べたように、根拠であり同時に目的である神のアガペーに対する応答として愛の傷手が刻印され、その愛の傷手というものが、自由な応答あるいは聴従という仕方で受け止められて、そこに無限なる愛が発動してくるということが、『雅歌講話』においても、『モーセの生涯』においても、アウグスティヌスにおいても確認された。その際、「実在的順序」としては、ロゴス・キリストの受肉存在から神的エネルゲイアが働き出すのだが、しかしわれわれにおける「発見の順序」としては、神的エネルゲイアの経験からロゴス・キリストの受肉が指し示される、と解されよう。

ここで、「神人的エネルゲイア」という表現を今少し見ておきたい。神人的エネルゲイアという言葉は、ディオニュシオス・アレオパギテースの『書簡四』の中に見られるものをマクシモスが援用していると思われる。さほど頻繁ではないが、時折肝心な箇所で見られるものである。すなわち、語られている事柄がとりわけ問題の中心に関わっているときには、「神人的エネルゲイア」という言葉が重要な意味を持ってくるのである。

「ロゴス・キリストは、超実体的であるからといって肉体（＝人間）から切り離されて単に神的に働いたのではなく、また人間であるからといって、神性から切り離された人間的なものを単に肉的に働かせたのでもなくて、人間となった神の何らか新たな神人的エネルゲイアを、われわれ

のために働かせたのだ。……語り得ざる結合・一性に即して神的エネルゲイアを肉的なものと適合させて人間化させたからである。」（『難問集』、PG九一、一〇五六BC）。

「主は、神人的エネルゲイアを自然・本性を超えて新たにした。……つまり主は、自然・本性において二様であり、相互に交流する生を適切に顕現させた。その生は神的な法と人間的な法とによって、同一なものとして混合なき仕方で結合している。すなわちその生は、単に地上のものを無縁で逆説的なものではなく、また諸々の存在物の自然・本性とは異なるものでもなくて、新しく生きる人間の新たなエネルゲイアをしるしづけているのである。」（同、一〇五七CD）。

こういった表現は、主なりロゴス・キリストなりを主語とした文脈で語られている。それをわれわれの側から見出してゆくならば、先ほどから述べてきたような「発見の順序」と「実在的な順序」との両者が微妙に重なってくると考えられよう。

ところで、「新しく生きる人間の新たなエネルゲイア」とは、別の文脈では「善く在ること」そしてアレテーの成立であり、アレテーの統合としての真実の愛の成立という言葉でも表される。ただこの文脈は、実際はイエス・キリストの姿を語っている文章でもある。そうすると、使徒たちの経験においてイエス・キリストに出会った使徒たち自身の姿と、『雅歌講話』における花嫁（人間）の姿と、イエス・キリスト自身のもつピスティス（イエス・キリストの姿）というものが重なってくることになる。ただ、この点は、本日は問題として開かれたままに留ておくことにしたい。ともあれ、こういった、「イエス・キリスト自身の信（ピスティス）」と「われわれの信（ピスティス）」とが、根拠づけるものと発現してくるものとの関わりとして結びついているであろう。

五　受肉の現在

ともあれ最後に、「受肉の現在」ということについて少しく思いを潜めることにしよう。

神の子の受肉といった、その意味として未曾有の出来事を扱うときには、徹底した時間論の探究、そして人間本性自身の成り立ちの探究、善の問題の探究などがすべて結集してはじめて、ことの真相が何らか見出されうるであろ

う。しかし、おおかたのドグマの書物においては、これらのことは探究の背後に切り離されてしまっていることが多い。それは、よく言えば、十分な信仰の経験、人間としての出会いの経験を持った上で、それとは独立に学問的客観的になされてゆくということでもあろうが、そこから偏見が生ずる場合があろう。すなわち一歩外に出れば、神とか信仰とか宗教とか聞いただけで、いわば拒否反応を示す人が（相当な知識人であっても）少なくない。そういう人々に対しても、やはり証聖者マクシモスのような人が「受肉の現在」を語っているところに身を晒して問題を捉えてゆくことが必要であろう。この点、マクシモスは、こう喝破している。

「今あなたによって蔑されている方は、かつてはあなたの上にあり、明らかにすべての時間（世代）とすべての自然・本性（ピュシス）との彼方に、それ自体として在った。しかし今は、あなたのために〔時間と自然・本性との〕両方に服した者になろうとしている。……かつてはただ神にして、身体から離れた者であったが、今は思惟的魂を有した肉を摂ったのである。」（『難問集』、PG九一、一〇四〇AB）。

これは、「かつて」と「今」が鮮やかに峻別されて語られている数少ない文脈である。また、「神のロゴスがわれわれのために、人間本性の弱さによって十字架につけられ、また神の力によって復活せしめられたのならば、ロゴスは明らかに同じことを、つまり受肉と復活のわざを、われわれのために今も霊的に為している。それは、われわれすべてを救うためである。」（『フィロカリア』Ⅲ、一五五頁）とも語られている。こうした文章を見ると、とりわけ（もちろん全聖書が教父たちの根底にあることは間違いないのであるが）「ヨハネ伝」第一五章など、あえて現在形で表現されている聖書の文脈が、まさに「同時的に」、こうした教父たちの言葉を支えていると感じられる。

「わたしの父は今に至るまで働いており、わたしもまた働く」（ヨハネ五・一七）とは意味深長な言葉であるが、何か通俗的かつ客体的な学問というものを突き抜けたかのように響く。そういう場面を注視しつつ、しかし徹底してマクシモスという人は、吟味・論理の鋭い人であって、根源的な「出会いの今」に、その都度立ち還ることをわれわれに促してくる。その根底に働く神人的エネルゲイアを見出し、聴従することによって、われわれの主体なり自己なり

が何ほどか変容し開花してゆくであろう。

そのように、主体・自己の「善く在ること、善く意志すること」への変容ということと、そこに現前する神人的エネルゲイアがロゴス・キリストを指し示しているということが、重なっているのである。それはおそらく、キリストの霊（プネウマ）によりつつ、その現存へと与ってゆく道でもあろうし、キリストの十字架を担いゆくことであろう。そして、われわれが担いゆくその力の根拠もまた、キリストの霊（プネウマ）であるという意味では、ここに微妙なある種の円環的構造が潜んでいるであろう。

他に、キリスト両意説については、述べる時間的余裕がほとんどなかったが、これは、キリストには迷いある意志（グノーメー）はなくて、キリストにおいては神的意志と人間的意志が完全にヒュポスタシス的結合として一体化しているということであった。そういったキリストの神人的な姿（神的意志と人間的意志の結合した姿）は、ある客体知として措定されるのではなく、神人的エネルゲイアの経験の中から指し示されてくること、すでに述べた通りである。そうした神人的エネルゲイアに聴き従うことによって人は神的霊を受け容れることができようし、そのことが、人間的ピュシスの完成への道を歩んでいくということにもなるであろう。

その意味では、真に現存し働いているものは、かつての今、あるいは使徒たちにおける今、そして「創造の今」において現存し、それゆえにこそ、歴史上のいかなる「今」においても、信（ピスティス）という志向的かたちのうちに、あるいは信というかたちとして、その都度生じるものであろう。この点、東方教父はとりわけ「不断の創造」ということを強調するが、創造の初めといっても、過去的な何億年前であるといった出来事というよりは、恐るべき過去であると同時に、現に今、持続している問題として捉えられるのである。すなわちロゴス・キリストの神人性の働きは、われわれが何ほどか己れを蔑してゆくこと、「自己よりも高くなること（脱自的愛）」、そして「善く在ること」などの、その成立の根拠として現前しているであろう。「善く在ること」は、マクシモスにおいてはキーワードとして使われているが、それは、「善く生きること」、「善く意志すること」とほとんど同一のことでもある。

ただ、そこで語られているのは、常人のあずかり知らぬ神秘的体験ではない。たといどれほど小さな人目につかぬ

ものであっても、何かわれわれの心の根底に働く神的エネルゲイアへの聴従、そしてそれへ与ってゆくということがあってはじめて、人間本性の完成・開花というものが、何ほどか見出されるであろう。

それはまた、他者との交わりというものが可能となる根拠でもある。「神的エネルゲイアのコスモロジー」もまた、語り直せば他者問題なのであって、アレテーの成立という内面に閉ざされたかのような事柄は、実は自己と他者との真実の交わりの可能根拠に関わるのである。すなわち、他者との関わりは、神との関わりを映し出すものであろうし、またその他者との関わりが真実成り立ってくる根拠を問えば、そこにはこれまでに述べたような神的エネルゲイアとの関わりが見出されてくる。そういう意味では、絶対の他者と自己と他者、といった三項関係はつねに問題の根拠に潜んでいるであろう。

以上、本日の話は、「神的エネルゲイアの経験」という観点から、「ロゴス・キリストの受肉」の信というものの内的位相をいささか問い披こうとしたものであった。もとより、奥深い難問の入口に立っているという感があるが、ここでひとまず今回の提題を終えることにしたい。

附記

本稿は、二〇〇九年九月、聖心女子大学にて開催された「教父研究会」で発表したものである。それに参加された方々、そして貴重な質問で啓発して下さった方々に対して、改めて感謝の意を表したい。また、当日の録音テープから文章に起こすという骨の折れる作業は、旧知の又野聡子さんが快く引き受けて下さった。この場を借りて厚く御礼申し上げる。